５年生通信
Move Mountains
５月２２日２７号

○第二言語習得に関すること

山田副校長が発行している「SOLAN　SPOTLIGHT」（https://blog.seto-solan.ed.jp/?cat=25）　言語学の観点からも英語習得、外国語教育についての記事が満載で、おすすめです。

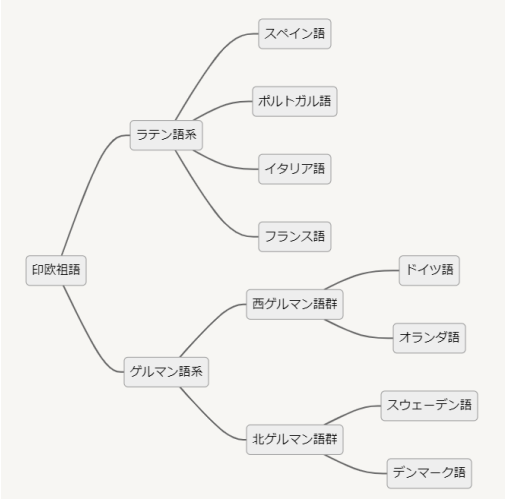
私も第二言語習得について少し書いてみます。

まず言語学の観点から見れば、日本語と英語はとても距離のある言語です。習得がとても難しいのです。逆も同様で、英語話者からすると日本語の習得はとても難しいのです。

2002 年アメリカ国防総省外国語学校における、英語の母語話者にとっての難易度レベルを見てみましょう。（カテゴリーが上がるほど難しい）

カテゴリー４：アラビア語、中国語、**日本語**、韓国語 カテゴリー３：ギリシャ語、ロシア語、タイ語、トルコ語　など カテゴリー２：ドイツ語、ルーマニア語 カテゴリー１：フランス語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語

言語には距離があります。祖語（もとになった言語）が同じなら、言語の距離は近いと言えます。例えば「印欧祖語（インドヨーロッパ語族）」の表が以下です。



上記の表とも結びつけて見てみましょう。

カテゴリー１（英語との距離が近い）フランス語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語は、全て同じ言語から派生したものが一目瞭然です。

日本語は、他の言語との繋がりはまだ分かっていません。

「難しいからやらない」ではなく、こういったことを知った上で第二言語習得に向かうのとそうでないのでは学習に向かう姿勢が変わるように思います。

Mr.Sam が興味深いことを言っていました。「なぜ日本を選んだのか」と聞いたところ、最初に出てきたのは寒すぎない（カナダは極寒）地域をまず考えたそうです。

そして、中国、韓国、日本辺りを候補にし、「日本語のリズムがドラムのようで、面白いから選んだ」と言っていました。

日本語を母語とする私たちにはあまりない感覚でとても面白いですね。

英語は、音楽のようで、緩急があるというようなことも言っていました。たしかに、いわゆるカタカナ英語って、淡々とした感じがします。

独学で２５以上の言語を学んできた冒険家であり、ノンフィクション作家の高野秀行さんも「現地に行って、現地の人の動きまで真似する」と言っています。（高野秀行さんは、誰も行かないような世界の秘境に行き、ルポを書いています。これが本当に面白いのでおすすめです。）

Mr.Sam も人のまねすることが上手なので、日本語の上達がすごく早いのかな、と思います。

どちらにせよ、「話せる」ことが目的ではなく、「話せるようになってコミュニケーションをとる」ことが目的です。

金曜日には、シンガポールからの児童を受け入れますが、英語が話せる／話せないではなくコミュニケーションをとっていきましょうね。

私は、ミャンマー、ラオス、タイなど東南アジアが好きで旅行していましたが、現地で英語を話せる人は少ないです。私も現地の言葉など全然分かりませんが、行って帰って来られたわけです。

それは、コミュニケーションをとろうと努力したからに他なりません。

目的を間違えずに学んでいきましょう。